

読書雑感

理事（総務担当）・副学長・事務局長 加藤 健



「豊泉」巻頭言の依頼を受け正直悩んでしまいました。ここ暫く本というものを読んでいないのです。図書館の機能は高度化・多様化しており、何も「図書館＝読書する場所」という単純な等式に固執する必要は無いのでしょうか、これ以外で図書館を語れるほどの素養も持ち合わせておりませんので、「読書」をテーマにした私のこれまでの貧相な体験談にしたいと思います。

若いうちはそれなりに読書はしたと思います。高校在学中当たりから就職当初の頃は、太宰治、坂口安吾など「無頼派」と呼ばれる作家の作品を好んで読みました。特に太宰。「人間失格」の最後、バーのマダムが「葉ちゃんは・・・神様みたいないい子でした・・・」という件は、読み終えた瞬間本当に全身が震えたのを覚えています。それ以降、彼の出版本は片っ端から購入し貪るように読んだものでした。当時はほかにも安部公房や大江健三郎なども良く読みました。その後は推理小説に嵌まり、特に日本では鮎川哲也が好きで、この作家の作品は殆ど読破したと思います。鬼貫警部シリーズは本当に面白かったな。結婚後は妻の影響で海外モノにのめり込み、S. King、D. R. Koontz などのモダンホラーや、Patricia Cornwell の検死官シリーズなど、実にたくさんのサスペンスものに夢中になりました。

この頃になると、私にとって「読書」とは「文学に浸る」とか「知識や教養を深める」という高尚さからは大きく懸け離れ、単なる「娯楽」となっていました。当時は東京勤めで、住居から職場まで通勤時間が長かったので、殺人的と云われる満員電車の鬱陶しさもなんのその、本のおかげで実に刺激的で充実した時間を過ごしていました。

「想像力」（正しくは「妄想癖」）も逞しくなり、とにかく行間から映像が次から次へと浮かび、私にとっての、「はてしない物語」の「Fantasia」は最高潮となっていました。

それがいつの頃からか、本はほとんど読まなくなってしまったのです。何故か？一つには地方勤めとなり職場から徒歩 10 分位の住居暮らしが多く、読書に費やしていた通勤時間が殆ど無くなったのも一因だと思います。それなら家で読めば？とお思いでしょうが、加齢のせいか年々老眼も進み、長時間読んでいると頭痛がしてくるという悲惨な毎日です。何だかんだと他のせいにはしていますが、結局は「読書欲」が消え失せたのだと思います。毎年、芥川賞・直木賞などの発表がありますが、何となく無関心になってきています。そのせいか最近「想像力」が衰えているなど実感しています。職場で仕事の書類を読んでも全く映像というものが浮かんで来ないのは何故でしょうか？「Fantasia」の崩壊です。

今回の原稿作成が刺激となったのか、不思議と今「読書欲」が湧いてきています。既読本の読み返しでも良いと。転勤族のため引越が多く、その度にかかりの本を処分していましたが、数人の作家の本は捨てきれず残してしまいました。読み返す時期が必ず来るといふ思いがどこかにあったのかも知れませんが、夢中になって読んでいた当時の思い出に耽けながら、二度目の津軽での生活を迎えているのも何かの縁だと思い、まずは太宰から始めようかと考えております。読書の秋に向け、早速、ピントのあった老眼鏡を買い求めに眼鏡屋に走りたいと思います。

（かとう けん）